佳作

人々が幸せになる未来とは

岡山県 倉敷市立大高小学校五年　渡邉 紗良

私は、戦後七十八年の今、広島県に落とされた原爆について知ろうと思い、広島平和記念資料館に足を運んだ。

原爆については、学校の図書館にある『はだしのゲン』を読んだり、テレビの平和特集を観たりしていたので、どのようなものなのかは分かっていたが、もっと知りたいと思った。

また、今現在、ロシアとウクライナによる戦争で、広島に落とされた原爆が、どうしても昔のこととして思えなく、人々が幸せになる未来とはどのように作りあげるのか考えていきたいと思った。

広島平和記念資料館に行くと、とても長い列ができていた。入場するのに三十分もかかった。いざ自分の順番が近づいてくると、ドキドキしてきた。ならんだと同時に、日本人もたくさんいたけれど、外国人もたくさんいたことにおどろいた。

私は、広島平和記念資料館に入場すると、まるで見たことのない世界に入ったみたいだった。

広島平和記念資料館で知ったこと一つ目は、原子爆弾について。原子爆弾とは、爆弾よりも大きいものだ。でもそれだけではないことを知った。それは、戦争で生きのびた人々の心に深いきずを負わせ、生きていくことに苦しみを与え続けてきたということだった。私は、そのことについて知ったしゅん間、思ったことがあった。今を生きているかぎり、平和を大切にしていこうと思った。

広島平和記念資料館で知ったこと二つ目は、被爆者の思いについて。被爆者と聞くと、「ゾクッ」としてたまらない。とてもむねがしめつけられる苦しみを感じる。でも被爆者にも、心の底から伝えたいことがあった。それは、たくさんの人々に、「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」ということだった。

広島平和記念資料館で知ったこと三つ目は、生きるということについて。生きるということは、とても幸せなことだ。でも、それだけではない。戦争で生きのびた人々は、家族や友人を失った悲しみを耐え、心身に残るきずや病を抱えながら生きていかなければならなかった。私はそのことを知って、今でも生きている人生で戦争で生きのびた人もたくさんいる。なら少しでも、その人々の苦しみを救ってあげたいと思った。

私は、広島平和資料館から出た後に考えたことがあった。それは、これから自分たちで、身近にある平和をつないでいく。そして、被爆者の思いを自分事として考えて行動する。これからの人生で、たくさんの平和がおとずれますように。